

原著論文

乳幼児の身体活動に関わる保育環境研究の展望と課題

Review of Research on the Issues of Childcare Environment Research
Related to Physical Activity of Infants

土橋 久美子 (白百合女子大学) ・ 松崎 洋子 (千葉大学)
Dobashi Kumiko (Shirayuri University) ・ Matsuzaki Yoko (Chiba University)

石沢 順子 (白百合女子大学)
Ishizawa Junko (Shirayuri University)

近年、子どもが身体を動かす機会が減少している傾向があり、子どもの運動能力の向上を図るべく方策が指針などで示され、幼少期から身体を動かす習慣を身につけること、身体活動を確保することが世界的な課題となっている。特に乳幼児の身体活動には、保育者を含む周囲の大人の関わりや、保育現場、家庭の環境などの影響があると予想される。

本研究では、幼児初期の身体活動に関わる保育環境評価尺度の開発に向けて、国内の身体活動に関する研究の中で、保育環境に関係した論文から、これまでの研究の動向を把握するとともに、既存の保育環境に関連する評価尺度についての課題検討を行った。その結果、身体活動の環境と保育内容に関する研究は、低年齢児では動きの種類や感覚との関連を、比較的年齢の高い幼児では運動能力・身体活動量との関連を検討しており、保育環境の豊かさが運動遊びなど体を動かす活動に影響していた。保育環境に関する研究では、幼児の運動能力向上の方策として、保育環境の重要性を示唆していた。保育環境尺度についての課題検討では、海外の保育環境尺度を参考に日本の保育現場の状況に合わせた評価尺度開発の必要性が挙げられた。

1. はじめに

近年、子どもが身体を動かす機会が減少している傾向がある。子どもの運動能力は、1986年頃から1997年頃に、低下していることが指摘されており、運動能力の発達において園や家庭での運動遊び時間や頻度などの運動経験要因が最も大きく関係しているとされた(杉原・森司・吉田, 2004)。2007年度から2009年度においては、「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」(文部科学省, 2011)が行われた。この結果を受け、幼児期運動指針(2012)が示され、「幼稚園、保育所などに限らず、家庭や地域での活動も含めた一日の生活全体の身体活動を合わせて、幼児が様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが望ましい。」と提唱された。また、2019年WHO(世界保健機関: World Health Organization)は、5歳未満の子どもの身体活動や睡眠などに関するガイドラインを発表しており、幼少期から身体を動かす習慣を身につけること、身体活動を確保することは世界的な課題となっている。特に、低年齢の子どもの身体活動には、保護者や保育者を含む周囲の大人の関わりや、保育現場や家庭環境による影響があると予想される。

例えば、保育に関する内容についてみると、保育所保育指針には領域「健康」のねらいの一つとして「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」(第2章保育の内容 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容)がある。松崎(2019)は、1, 2歳児は一人ひとりの発達状況が異なり、着替えなどの身支度や日常で保育者の個別の援助が必要であり、保育者の体制や保育形態等が子どもの身体活動の内容や時間に直接影響を及ぼしているとし、幼児初期の保育では、3歳以上児とは異なる環境構成や保育内容、保育者の配慮等の保育方法が必要であると結論づけている。

乳幼児の動きの獲得や運動発達は、生活環境や日常における経験が影響していること（古賀・上田・青柳・音成，2000；坂上・金丸，2017）や一緒に生活している保護者の日常習慣（井上・山瀧・谷，2006）が影響していることが明らかになっている。

一方、子どもにとってどのような保育環境が望ましいかを測る指標として、国内外で保育環境尺度が作成されている。しかし、身体活動に関わる総合的な保育環境尺度は、3歳以上の幼児を対象とした MOVERS があるのみである。そこで、筆者らは国内の現状に合わせた3歳未満児対象の保育環境尺度を作成するための試行を重ねてきた（松嵩・石沢・土橋，2021b）。

本研究では、身体活動に関わる保育環境評価尺度の開発に向けて、学会誌及び紀要、報告書に掲載されている国内の身体活動に関わる研究の中で、保育環境に関係した論文を CiNii および Nuar を用いて抽出し、これまでの研究の動向を把握するとともに、その課題と展望についてまとめることを目的とした。

また、既存の保育環境に関連する評価尺度についての課題も併せて検討し、身体活動に関わる保育環境の評価尺度開発へ繋げる。

2. 結果と考察

まず、身体活動に関わる保育環境の先行研究を調査し、その動向を整理する。次に、保育環境に関する尺度を取り上げて検討する。

(1) 身体活動に関わる保育環境研究の動向

検索の結果、身体活動に関わる保育環境の先行研究では、主に保育内容、園内の保育環境、園外の環境に関する検討が行われていた。以下、それらの視点ごとに傾向をまとめた（表1）。

表1 身体活動に関わる保育環境に関する論文一覧

No.	検討の視点	タイトル	研究対象	発表年	著者	所収文献・学会誌名	巻・号・頁	検索データベース
1	保育内容	保育所における保育士の働きかけと運動量との関連	6歳児	2002	菊池 透, 山崎 恒, 亀田一博, 樋浦 誠, 仁科正裕, 内山聖	小児保健研究	61巻3号 p.470-474	Nuar
2		幼稚園児の運動能力と運動遊びとの関連	年長	2011	山田志麻, 花田道子, 細井陽子, 清淵由利子, 荒木裕子	九州女子大学紀要	47巻2号 p.37-49	CiNii
3		低年齢保育における動的環境の検討：感覚運動発達の子を巡って	幼児（1・2・3歳児）	2019	庄司 亮子, 飯村 敦子, 小林 保子, 袴田 優子, 竹内 麗子, 河合 高鋭, 原 秀美, 山崎 奏名子, 岩羽 紗由実, 小林 芳文	保育科学研究	10号 p.29-45	CiNii
4		乳児保育室の空間構成と保育及び子どもの行動の変化 - 「活動空間」に注目して-	0歳児	2008	村上博文, 汐見稔幸, 志村洋子, 松永静子, 保坂佳一, 富山大土	こども環境学研究	3巻3号 p.28-33	CiNii
5		園庭や遊戯室の広さと園生活中の5歳児の身体活動量の関係	5歳児	2008	北村潔和, 佐々木ひかり	富山大学人間発達科学部紀要	2巻2号 p.195-199	CiNii
6		異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究	異年齢児	2008	細谷俊子, 積田 洋, 青木 健三	日本建築学会計画系論文集	73巻634号 p.2565-2572	CiNii
7		園庭環境の違いが幼児の身体活動量と運動能力に及ぼす影響 -園庭の芝生化に着目して-	4-6歳	2010	中島 弘毅, 大塚 貴史, 張 勇, 根本 賢一, 山崎 信幸	松本大学研究紀要	10号 p.185-195	CiNii
8		乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識”の変容	乳幼児	2012	汐見稔幸, 村上博文, 松永静子, 保坂佳一, 志村洋子	保育学研究	50巻3号 p.298-308	CiNii
9		保育所における園庭と園外での外遊びの活動状況	3歳児	2017	野中壽子, 小泉 大亮, 穂丸 武臣, 張 琬	発育発達研究	74号 p.19-25	CiNii
10		保育所における園庭環境が幼児の身体発達に与える影響	3歳~5歳	2019	野中壽子	名古屋市立大学大学院 人間文化研究科人間文化研究	31号 p.77-84	CiNii
11		保育所における1歳児の歩行と建築環境の関係に関する研究	1歳児	2019	長谷川惠美, 定行まり子	日本女子大学大学院紀要	25号 p.27-34	CiNii
12		保育所における1歳児の身体活動量と建築環境の関係に関する研究	1歳児	2020	長谷川惠美, 定行まり子	日本女子大学大学院紀要	26号 p.67-75	CiNii
13	園外の環境	保育施設における外遊びの環境に関する研究 -園庭や公園での遊びを通してみた屋外保育環境	2-4歳児	2007	名越めぐみ	都市公園 東京都公園協会	178号 p.72-74	CiNii
14	園外の環境	都市部における保育施設の屋外保育環境について 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究その2	乳幼児	2008	小池 孝子, 定行 まり子	日本建築学会計画系論文集	73巻628号 p.1197-1204	CiNii

1) 身体活動に関わる環境と保育内容に関する研究

身体活動の環境と遊びを中心とした保育内容との関連を検討した研究は、低年齢児では動きの種類や感覚との関連、比較的年齢の高い幼児では運動能力・身体活動量との関連を扱っていた。

庄司ら(2019)は、低年齢児(1・2・3歳児)の運動スキル、すなわち感覚運動発達の実態と低年齢児保育における動的環境の現状を調査した。ここでは「動的環境」を「乳幼児が自発的に動きたくなる環境、手を出しなくなる環境すなわち、アフォーダンスのある環境」と定義しており、豊かな動的環境下で様々な活動が見られた。低年齢児の様々な動きや感覚を育てていくためには、乳幼児が自ら関わりたくなる環境を用意することが重要であることを示唆している。

一方、菊池ら(2002)は、6歳児を対象に身体活動に関わる保育内容が幼児の運動量に及ぼす影響を検討したところ、幼児期の運動量の確保および運動習慣の育成と関連があった。また、山田・花田・細井・溝淵・荒木(2011)の研究では、幼稚園の年長児を対象に「走・跳・投」の基礎運動能力と運動遊び状況との関連について検討した。その結果、運動遊びの経験や身体活動量と運動能力が関連していた。

これらの結果から、身体を動かす遊びを中心とした活動や保育内容は、保育環境と密接に関連していることが見出された。

2) 園内の保育環境の構成に関する研究

身体を動かす遊びを行うために、保育室や園庭の有無や広さは重要な要因となりうる。次に、園庭の広さと幼児の活動との関連を検討した研究を取り上げる。

北村、佐々木(2008)らは、公立・私立保育園、幼稚園での歩数の違いから自由に動き回ることのできる広い空間が、幼児の身体活動量の増加に貢献することを示し、遊戯室や園庭の広さが影響していることを示した。また、野中・小泉・穂丸・張(2017)は、園庭の広さと園外に出かけた際の歩数や身体活動量の比較から、園庭の広さは特に活動性の高い幼児にとって重要な環境要因となっていることを指摘した。これらの研究から、幼児が自由に動き回ることができる園庭や保育室等の大きさが幼児の身体活動量の確保と関連することが明らかになった。

しかし、単に広い面積があればよいのではなく、環境の空間構成が乳幼児の遊び等の活動に影響するという報告もある。村上ら(2008)は、0歳児保育室の空間構成を変更することによる多様な活動の展開を検証し、保育の質を評価するアセスメントづくりに向けての基礎的研究を行った。また保育室に焦点を当てた研究では、汐見・村上・松永・保坂・志村(2012)が、乳児(0歳児)保育室の空間構成が乳幼児の行為や保育者の意識に与える影響について検討し、空間構成の変更によって自由遊び時間における乳幼児の行動が変容することを明らかにした。細谷・積田・青木(2008)は異年齢保育を行っている保育園で行動観察調査を行ったところ、乳幼児が自由に遊びを選択できる室内遊びにおいて、約50%の割合で異年齢間交流が見られ、最低3人から4人が遊べるスペースがあると交流が行われやすく、共有スペースで遊びの種類のすみわけが行われると選択性が増し、異年齢の交流を促したことを示した。

一方、園庭環境と乳幼児の身体活動に関しては、物理的な保育環境の違いと乳幼児の身体活動量や運動能力向上の状況や、個人差との関連を検討した研究があった。長谷川・定行(2019, 2020)は、保育所における1歳児を対象に、園庭の有無などの環境が乳幼児の歩行や運動の機会、身体活動に及ぼす影響について考察し、園庭等(外遊び環境)の物的環境構成により、乳幼児が経験する身体活動の質が異なることを明らかにした。野中(2019)は、空間的環境が身体発達に及ぼす影響について、園庭環境は運動能力に顕著な差はもたらしてはいないが、多様な動きの獲得には影響を及ぼすことを示唆している。

中島・大窄・張・根本・山崎(2010)は、保育所に在籍する4歳から6歳の幼児を対象に、園庭が芝と土という園庭環境の違いが幼児の身体活動量と運動能力にどのような影響を及ぼすかを明らかにした。その結果、芝生の園庭を有する園の幼児は、男女共に土の園庭を有する園の幼児に比して明らかに平日の身体活動量(歩数およびエネルギー消費量)が多く、また、男児においては立ち幅跳びおよび25m走、後方ハイハイ走における運動能力が高かったという結果を見出した。

以上のことから保育室や園庭等の保育環境の構成が、遊びや生活等の身体活動に与える影響は大きく、乳幼児が全力で体を動かすことが可能な広さや遊びやすい空間を構成することによって、身体活動量や動きの種類等が多くなり、乳幼児の豊かな身体活動につながっていることが見出された。

3) 園外の環境に関する研究

前節で挙げた通り、園庭を持たなかったり十分な園庭環境がなかったりするために、幼稚園や保育所等では、保育室や園庭だけでなく、園外の地域にある公園等に出掛けて活動することも少なくない。戸外を対象とした研究では、名越（2007）は、園庭を持つ保育所幼稚園、園庭を持たない保育所を対象に、2歳から4歳児の外遊び・散歩場面での居場所や行為を記録した。園庭や公園では共通する遊びが見られたが、公園は遊びの種類が限られ、園庭の方が固定遊具を使った遊びの種類が多く、創造的だったとしている。また、立地や周辺環境によって外遊びの時間や遊びの種類が大きく変わることも明らかにした。

また、小池・定行（2008）も、都市部の保育施設を対象に園庭、公園での遊びの実態を調査した結果、園庭と公園では、遊びの種類・質に違いがあり、園庭の方が多様で創造的・発展的な遊びが行われていたと結論づけている。公園等には園庭にない大型の遊具や自然環境があり、魅力的な屋外保育空間だったが、施設の立地によっては十分な設備を有する公園等がないケースもあったとしている。

実際には地域による差が大きいですが、乳幼児にとっては園庭と公園は異なる種類の環境であることが研究から見いだされたことから、特徴を理解した上で、遊びや活動を実施することが必要であるといえるだろう。

(2) 身体を動かす保育環境に関する評価尺度

これまでの分析により、身体活動と保育環境は密接に関わっていることが明らかになった。ここでは、既存の保育環境尺度について、その特徴や課題点等を検討する。

海外で作成された保育環境尺度のうち、日本語でも活用できるものの中から、今回は「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール【MOVERS】、新・保育環境評価スケール①【ECERS-3】、新・保育環境評価スケール②【ITERS-3】の3点を挙げる（表2）。

表2 保育環境尺度一覧

NO.	タイトル	内容など	発表年	著者/編者 (監訳者) など	頁
1	「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール-保育における乳幼児の運動発達を支えるために	イギリスで作成された運動による身体発達面のスケール 〈MOVERS〉	2018	イラム・シラージ, デニス・キングストン, エドワード・メルウィッシュ (秋田喜代美 監訳)	120
2	新・保育環境評価スケール①〈3歳以上〉	アメリカで作成された保育の質を総合的に評価するスケール 〈ECERS-3〉	2018	テルマ・ハームス, デビィ・クレア, リチャード・M.クリフォード, ノリーン・イエゼジャン (埋橋玲子 訳)	95
3	新・保育環境評価スケール②〈0・1・2歳〉	アメリカで作成された3歳未満児用の集団保育の質を測定するスケール 〈ITERS-3〉	2018	テルマ・ハームス, デビィ・クレア, リチャード・M.クリフォード, ノリーン・イエゼジャン (埋橋玲子 訳)	91

「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール【MOVERS】は、イギリスで作成された環境評価スケールの一つであり、乳幼児期（2歳から6歳）の保育施設の子どもたちの動きの経験や環境の質を評価するものである。4つの領域（サブスケール）である「身体の発達のためのカリキュラム、環境、道具や遊具」「身体発達のためのペタゴジー」「身体活動と批判的思考を支えること」「保護者と保育者」の中に合計11個の項目が設定されている。このスケールの特徴としては、「体を動かす遊びのための環境」を評価するにあたり、物的環境や園内での人的環境にとどまらず、観察・評価の項目や、保護者や専門家など外部の人的環境を活用するという視点が幅広く含まれている点が挙げられる（松崎・石沢・土橋, 2021a）。

新・保育環境評価スケール①【ECERS-3】は、アメリカで作成された3歳以上児対象の保育の質を総合的に評価するスケールである。領域（サブスケール）には、「空間と家具」「養護」「言葉と文字」「活動」「相互関係」「保育の構造」の6つがあり、その中では35項目（空間と家具：7、養護：4、言葉と文字：5、活動：11、相互関係：5、保育の構造：3）で構成されている。特徴として、子どもの学びに向かう力に注目し、「もの・ひと・こと」のあり方を捉えていることが挙げられ、「活動」「相互関係」に身体を動かす項目が含まれている。

新・保育環境評価スケール②【ITERS-3】は、アメリカで作成された3歳未満児（初版では2歳半）の集団保育の質を総合的に測定する環境評価スケールである。新・保育環境評価スケール①【ECERS-3】と同様、領域（サブスケール）には、「空間と家具」「養護」「言葉と絵本」「活動」「相互関係」「保育の構造」の6つがあり、その中に33項目が設定されている。保育環境の評価に関して、物的・人的環境、カリキュラムだけでなく、健康や安全を確保する養護や言葉に関することなど、乳幼児と保育者との言語的な関わりの重要性も取り上げている点がこのスケールの特徴である（松寄ら、2021a）。

これらの保育環境尺度に関し、菅原（2021）は、「これら海外で作成された尺度を用いる場合は、その国のナショナルカリキュラムを基盤として開発されていることを忘れてはならず、使用する際には幼稚園教育要領や保育所保育指針を十分に参照しながら用いる必要がある」と指摘している。松寄ら（2021a）も、「保育環境は、その国や地域の文化や価値観と密接に関連していることから、海外の指標がそのまま日本の保育環境にあてはまるわけではない」と指摘しており、具体的な保育環境について、保育室・園庭などのスペースや保育教材・室内遊具などの物的環境や子ども、友達、保育者などの人的環境のように多様な種類があるとし、既存の保育環境に関連する評価スケールを分析し、3歳未満児の身体活動に必要な環境の要因を明らかにした。日本の保育に活用するためには、日本の保育現場の状況に合わせた保育環境評価尺度の開発が求められるといえよう。

3. 総合考察と今後の課題

本研究の目的は、国内の身体活動に関わる保育環境の先行研究の動向を探るとともに、既存の保育環境に関連する評価尺度も含めてその課題を検討することであった。

身体活動の環境と保育内容に関する研究は、低年齢児では動きの種類や感覚との関連、比較的年齢の高い幼児では運動能力・身体活動量との関連を検討しており、保育環境の豊かさが運動遊びなど体を動かす活動に影響していた。そして、保育環境に関する研究は、保育室や、園庭、公園など戸外の保育環境での遊びの特徴や課題点、身体活動量の測定などの検討が多く行われていた。保育室、園庭等の広さや環境構成は幼児の身体活動量や身体活動の経験内容と関連しており、幼児の運動能力向上の方策として、保育環境の重要性を示唆していた。

一方、保育環境尺度についての課題検討では、海外の保育環境尺度を参考に日本の保育現場の状況に合わせた評価尺度開発の必要性を挙げた。保育環境尺度では、物的環境や園内での人的環境にとどまらず、保育の観察・評価の項目や、保護者や専門家など外部の人的環境を活用するという項目があり、カリキュラムの視点から保育環境を捉えている。しかしながら国内では、この視点から身体活動に関わる保育環境を捉えた研究を見つけることはできず、物的環境、空間構成との関連に関する研究が大半を占めていた。

松寄ら（2021a）は、様々な評価スケールを詳細に検討する必要性を述べており、子どもの養育に関する評価指標である「ポジティブな養育のチェックリスト」（菅原・松本、2009）や子どもと保育者・教師の関係を主としたCLASS（Classroom Assessment Scoring System；Pianta & Carollee, 2009）、千葉市等自治体が保育環境を評価して実践に生かす試み（砂上、2020）などを挙げている。今後も、日本における身体活動に関わる具体的な保育環境評価を検討し、日本の保育現場の状況に合わせた妥当性・信頼性を担保した評価尺度の開発を目指すとともに、保育実践の記録や評価やカリキュラムとの関連についても検討する必要がある。

文献

- 1) 長谷川恵美, 定行まり子 (2019) 保育所における1歳児の歩行と建築環境の関係に関する研究, 日本女子大学大学院紀要, 25号, 27-34.
- 2) 長谷川恵美, 定行まり子 (2020) 保育所における1歳児の身体活動量と建築環境の関係に関する研究, 日本女子大学大学院紀要, 26号, 67-75.
- 3) 細谷俊子, 積田洋, 青木健三 (2008) 異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態の研究, 日本建築学会計画系論文集, 73巻, 634号, 2565-2572.
- 4) 井上芳光, 山瀧夕紀, 谷玲子 (2006) 母親の運動経験・活動性が幼児の運動量・運動能力に及ぼす影響, 日本生理人類会誌, 11巻, 1号, 1-6.
- 5) イラム・シラージ, デニス・キングストン, エドワード・メルウィッシュ, 監訳: 秋田喜代美 (2018) 「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール - 保育における乳幼児の運動発達を支えるために, 明石書店
- 6) 菊池透, 山崎恒, 亀田一博, 樋浦誠, 仁科正裕, 内山聖 (2002) 保育所における保育士の働きかけと運動量との関連, 小児保健研究, 61巻, 3号, 470-474.
- 7) 北村潔和, 佐々木ひかり (2008) 園庭や遊戯室の広さと園生活中の5歳児の身体活動量の関係, 富山大学人間発達科学部紀要, 2巻, 2号, 195-199.
- 8) 小池孝子, 定行まり子 (2008) 都市部における保育施設の屋外保育環境について 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究その2, 日本建築学会計画系論文集, 73巻, 628号, 1197-1204.
- 9) 古賀範雄, 上田毅, 青柳領, 音成陽子 (2000) 独立歩行の開始時期と基本的動作の開始時期との関連, 発育発達研究, 2000巻, 28号, 6-12.
- 10) 松寄洋子 (2019) 幼児初期の子どもの基本動作発達と保育環境～3保育所の比較～, 日本乳幼児教育学会第29回大会論文集, 122-123.
- 11) 松寄洋子, 石沢順子, 土橋久美子 (2021a) 乳幼児期の身体活動に関わる環境についての研究(1) - 保育環境における評価スケールの比較 -, 千葉大学教育学部研究紀要, 第69巻, 145-151.
- 12) 松寄洋子, 石沢順子, 土橋久美子 (2021b) 幼児初期の「身体活動に関わる保育環境尺度」の作成(1) 日本保育学会第74回大会発表論文集, 982-983.
- 13) 村上博文, 汐見稔幸, 志村洋子, 松永静子, 保坂佳一, 富山大士 (2008) 乳児保育室の空間構成と保育及び子どもの行動の変化 - 「活動空間」に注目して -, こども環境学研究, 3巻, 3号, 28-33.
- 14) 文部科学省 (2011) 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書, https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm (2021年11月6日確認)
- 15) 文部科学省幼児期運動指針策定委員会 (2012) 幼児期運動指針 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319192.htm (2021年11月6日確認)
- 16) 中島弘毅, 大野貴史, 張勇, 根本賢一, 山崎信幸 (2010) 園庭環境の違いが幼児の身体活動量と運動能力に及ぼす影響 - 園庭の芝生化に着目して -, 松本大学研究紀要, 10号, 185-195.
- 17) 名越めぐみ (2007) 保育施設における外遊びの環境に関する研究—園庭や公園での遊びを通して見た屋外保育環境, 都市公園, 178号, 72-74.
- 18) 野中壽子, 小泉大亮, 穂丸武臣, 張琬 (2017) 保育所における園庭と園外での外遊びの活動状況, 発育発達研究, 74号, 19-25.
- 19) 野中壽子 (2019) 保育所における園庭環境が幼児の身体発達に与える影響, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 31号, 77-84.
- 20) 坂上裕子, 金丸智美 (2017) 母子遊びにおいて観察された未就園2歳児の基本的動きの経年変化: -2004・2005年度と2010・2011年度の比較 -, 保育学研究, 55巻, 1号, 19-30.
- 21) 汐見稔幸, 村上博文, 松永静子, 保坂佳一, 志村洋子 (2012) 乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識”の変容, 保育学研究, 50巻, 3号, 298-308.

- 22) 庄司亮子, 飯村敦子, 小林保子, 袴田優子, 竹内麗子, 河合高鋭, 原秀美, 山崎奏名子, 岩羽紗由実, 小林芳文 (2019) 低年齢児保育における動的環境の検討: 感覚運動発達の育ちを巡って, 保育科学研究, 10号, 29-45.
- 23) 菅原航平 (2021) 保育者をめざす学生の評価尺度を用いた保育評価に関する印象について, 別府大学短期大学部幼児・児童教育研究センター, センターレポート, NO.40, 43-48.
- 24) 菅原ますみ, 松本聡子 (2009) 保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から, 赤ちゃんとママ社
- 25) 杉原隆, 森司朗, 吉田伊津美 (2004) 幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析, 平成 14 - 15 年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書
- 26) 砂上史子 (2020) 令和元年度 千葉県・大学等共同研究事業報告書「保育環境, 家庭環境が 1-2 歳児の社会 - 情動的能力に及ぼす影響の検討」千葉県・千葉大学
- 27) テルマ・ハームス, デビィ・クレア, リチャード・M. クリフォード, ノリーン・イエゼジアン, 訳: 埋橋玲子 (2018) 新・保育環境評価スケール① (3 歳以上), 法律文化社
- 28) テルマ・ハームス, デビィ・クレア, リチャード・M. クリフォード, ノリーン・イエゼジアン, 訳: 埋橋玲子 (2018) 新・保育環境評価スケール② (0・1・2 歳), 法律文化社
- 29) 山田志麻, 花田道子, 細井陽子, 溝淵由利子, 荒木裕子 (2011) 幼稚園児の運動能力と運動遊びとの関連, 九州女子大学紀要, 47 巻, 2 号, 37-49.

付記

本研究は, 令和 2 (2020) 年度科学研究費助成事業 (学術研究基金助成金) (課題番号: 20K02698 研究代表: 松崎洋子) を受けて実施した研究の一部である。なお, 本論文は全て共同執筆者の協議に基づき作成している。共同執筆につき, 章の分担は明記できない。

【英文要旨】

In recent years, children have tended to have fewer opportunities to move their bodies, and the guidelines have been shown to improve their athletic ability.

Specifically, it is expected that the physical activity of infants is affected by the involvement of surrounding adults including nursery teachers, childcare sites, and their home environment.

This study examined the paper on environment in the research on physical activity in Japan toward the development of a childcare environment evaluation scale related to physical activity in early childhood.

In addition to grasping the research trends, we examined issues regarding evaluation scales related to the existing childcare environment.

The results showed that studies related to the environment of physical activity and the content of childcare examined the relationship between the type and sensation of movement in younger children, and the relationship with motor ability and physical activity in relatively older infants. Furthermore, physical activity such as exercise play affected the richness of the childcare environment.

The importance of the childcare environment was examined as a measure to improve the athletic ability of infants.

The examination of issues regarding the childcare environment scale highlighted the necessity of developing an evaluation scale that matches the situation of childcare sites in Japan regarding overseas childcare environment scales.